きょうはなにいろ？
けるくるーる
こぎんとこぎんのある生活をたのしもう
第12号

発行：こぎん刺し絵糸
2016/7/30 発行
http://kogin-eito.com/

モドコ・アレコレ ⑪ 猫のマナグ

ふにゃふにゃと、見つめてほしい。
だけど柄はシャープにリズミカルに。

さて今回のモドコは「猫のマナグ」。「マナグ」とは眼（まなこ）のこと。猫ブームのおかげでしょうか、人気のモドコのひとつです。

縦に並んだ2つの「結び花（四ツ花ッコ）」の両脇に、横にひかれた糸があるのが特徴です。この糸の部分が目を細めたところに見えるようですがいかがでしょう。

猫の目の色は、最も個性の出る部分だという人もいるほど、千差万別です。青や緑、褐色に、オッドアイ。くるくる変わる美しい瞳は、時に野生を秘め、時にはこの世の心配事などおかまいなしの様子で柔らかく細められ。模様として写し取った昔の人たちも、きっと現代のわれわれ同様、その姿に癒されていたのでしょうね。

＊＊＊

こぎん刺しの図案として考えると、一つだけ刺してもいいですが、連続で並べるといっそう面白いモドコです。ピッタリくっつけて刺したり、「流れ」と呼ばれるラインをはさんでアクセントを入れたり、枠の部分を重ねてつなげたり。たくさん並べばならぶほど、定期的に表れる横の糸と花ッコがリズムを生みます。肉球のように見える「猫の足」のモドコや他のモドコとあわせた図案をつくり、猫を主役に物語をイメージしても楽しいですよ。

野良猫百景

ある夜のこと。帰宅する道みち、すこし先の路上に何かキラッと光るものがあった。ちょうど家のあるあたりだ。目を凝らすと、そこにだけぼんやり黒いかたまりがあるようだ。

近づくにつれて、輪郭がはっきりしてきた。小さな黒い雪だるまのような、にしては、やけになで肩のシルエット。街路灯を背中に従え、逆光でなお黒さが際立つ。

それは猫だった。まるで出迎えのために待機していたように、こちらをまっすぐ見て、すっと座っている。前足は行儀よくふたつ並べて揃えている。距離がつまってきても微動だにしない。あまり絵に描いたような座り方なので、正体がわかった瞬間つい「おお」と声が出てしまった。それでもまったく驚くことなく、暗闇に光る目を浮かべている。

暗闇の猫と帰宅途中の私。互いにかすかな緊張を漂わせて正面から距離をつめるうちに、とうとう三〇センチほどの傍を通りすぎるところまで来た。

「やあ、どうした」と何気ない素振りで声をかけてみたものの、猫はこちらを一瞥さえせずに、やっぱりまっすぐ前をみている。どうやら出迎えるべきは私ではなかったらしい。こっそり肩を落としたが、家の玄関でもう一度振り返ると、猫も向こうでこちらを振り返っていた。（了）

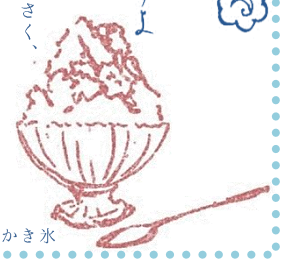
八月の一句

橋のした出番今かと花火船

（実）

よく晴れて、皆が楽しみにしていた花火大会も中止の心配はなくなった。うだるような暑さと裏腹に、橋を行きかう人々は足どりもかろやかだ。提灯をぐるりとぶらさげた舟たちは、橋の上から降ってくるざわめきを聴きながら、人々が乗り込む時間をじっと待っている。

今月のホッペタおちてますよ



ざくざくざく、
こめかみおさえて
もうひとさじ。

No. 004　かき氷

《こぎん刺し絵糸の予定》 2016/8/7（日　）バッグチャームとミニブローチのワークショップ＠川越 Hamano-ya　初心者 OK、手ぶらで OK

季節のぜいたく
⑫ 収穫

単なる食いしん坊かと言われたら、それも否定できないけれど。

暑い夏が来た。さんさんと降り注ぐ太陽をうけて、春に植えた野菜たちが収穫のときを迎える。東京で畑をもつのは難しいけれど、ベランダや庭で家庭菜園をしている人も多いはずだ。

今年は我が家でもゴーヤを鉢植えした。ベランダで育てるために横に誘導したつるが伸び、そろそろ実がつきはじめている。花や木も手ずから育てたものはとくべつ可愛いと思えるものだが、実のなる植物はその思いもひとしおである。

ちいさなちいさな黄色の花がすぐついたと思ったら、あれよという間に爪先ほどの緑がふくらみ、数日のうちにはミニチュア模型のようなゴーヤがぶら下がりはじめた。ひとつ、ふたつ、数えるとなんと7つも生っている。

できた順に大きさも少しずつ違い、まるで兄弟のように愛らしい。

かつての夏休み、祖父母の家の畑にいくのは楽しみのひとつだった。虫がいると騒ぎながらふかふかの柔らかい土を踏み分け入ると、そこにはトマトの青い香りがたちこめ、背高くもじゃもじゃ帽子をつけたトウモロコシが重たそうに待っていたものだ。そんなことを思い出しながら、ちいさな都会のベランダで収穫のときをむかえるのを待つのもまた風情がある。

今月の花ッコ
④ はす

気高く咲く水辺の風物詩。

夏のさなか、水辺の蓮が、鮮やかな白や濃い桃色の花を大きく咲かせる。水上に茂るたくさんの葉にも埋もれず、どこか透き通るような気高い美しさで首を伸ばす。濃い緑と花の色のコントラストとが涼し気である。

蓮は明け方に人知れずつぼみをひらき、昼過ぎにはまた閉じてしまう。美しい花を楽しめるのはほんの数日、ひらいては閉じを毎日繰り返す。それを終えるとしずかに散っていく。つぼみは一度にひらくので、「ポン」と音がするという話もある。花托（かたく）とよばれる花の下部が蜂の巣に似ていることから、「はちす」が転じて「はす」と呼ばれるそうだ。

水中の泥に根を張り、地下茎はおなじみのレンコンとなる。果実はくず湯のように溶いて飲んだり、調理して甘味とすることもある。葉は大きく丸く、水をはじいてのせた姿が有名だ。茎も食用となる。緑茶に花の雄しべなどで香りをつけたものは蓮の花茶として楽しまれ、渋みもあるが、さわやかな香りがよい。

アジア圏では文化的に神聖な花としても好まれるから、生活に密着して無駄なく使い道が考えられているのも、そうした背景もあってのことかもしれない。

この時期全国各地で「はす祭り」がおこなわれるが、こぎんの郷・青森では弘前公園が名所だそうだ。八月ごろが見頃とのこと。涼しい早朝にぜひ訪れたい。

制作近況

みんな大好きバッグ。選ぶ際のこだわりのひとつが持ち手ではないでしょうか。このところのバッグ制作で一番悩んだところでした。身長や体格、使い方や利き腕など、突き詰めて考えるとたくさん条件があるものなんですね。優しい使い心地としっかりした作りを求めて、試行錯誤。ほんとうの究極はチャッと取り出したメジャーで測ってのオーダーメイドなわけですが、すべてをそうともいかないわけで……。

しかし、あーでもない、こーでもないと自分や周りの人でポーズを決めるのも結構楽しいものでした。完成したバッグをみかけたら、あなたもぜひポーズをとってみてくださるとうれしいです。鏡ご用意しておきます。

《編集後記》

今年は雨が少ないな、と思っていたら、あっという間に真夏。七月はイベント盛りだくさんでしたが、八月は部屋を涼しくして落ち着いて制作にも励みたいと思います。みなさんも水分補給など気を付けてどうぞ楽しい夏に。

本紙におけるすべての著作権は発行者に帰属します。
お問い合わせ、ご意見は mail@kogin-eito.com まで。